

## 会長校挨拶

明治学院大学図書館  
館長 助川 哲也

第 85 回私立大学図書館協会総会・研究大会の開催に先立ちまして、挨拶をさせていただきます。

2024 年、現在の様々な課題に向き合い、私立大学図書館の未来を構築し、連帯を強めていく本大会は、会場校である駒澤大学様の御尽力と、御講演をいただく先生方、そしてオンラインで視聴いただく役員校、会員校の皆様の御協力を得て、ここに開催の運びとなりました。総会・研究大会に関わってくださった全ての皆様に、心からのお礼とお慶びを申し上げます。

また、総会への祝辞を文部科学省研究振興局参事官付学術基盤整備室長・土井大輔様、国立情報学研究所学術基盤推進部次長・細川聖二様よりいただきました。ありがとうございました。

本年の研究大会、テーマは『大学図書館と諸機関との連携』です。昨年のテーマが『ポスト・コロナを切り拓く大学図書館』でしたので、時代状況が一つ更新されたという印象を受けますが、実際のところはこの夏もコロナに関しては要警戒であり、決して油断できない存在としてすぐそばにありました。とはいえ、学生がキャンパスに入ることができず、図書館の利用もままならなかった 2020 年当時を振り返れば大きな違いがあります。大学図書館員の大変な努力があり、現在の我々はポスト・コロナのなかで未来を模索できる位置にいるのです。

ただ、問題がなくなったわけではありません。コロナの次にやってきたのは、円安と物価高でした。研究資料としての海外の学術雑誌、図書、データベースなどの値上がりが甚だしく、どの大学の図書館も予算のなかでの苦闘があったのではないのでしょうか。個別の論文講読の見直しと引き換えに新たなデータベースの導入など、実を得るための策を練らなければいけない時期でもありました。米国の大学では、学術雑誌の出版社に対し共闘を働きかけている例もあると聞きます。研究資料の高騰は全世界的な問題になりつつあります。

しかし、大学図書館は、どのような状況が目前にあらうとも、常に課題を乗り越えていかなければならない組織です。なぜなら、図書館は大学の柱であり、顔であるからです。知恵を出し続けなければいけないのです。

ここであらためて『大学図書館と諸機関との連携』を考えてみたいと思います。言い方を変えるならば、「デジタルベースでのあらゆる機関（リポジトリ）との連携」ということになるでしょうか。

まず、物理的にわかりやすいところで、国公立大学間におけるコンソーシアムの推進です。各大学の電子登録(OPAC)の垣根を取り払い、協定校どうしの蔵書の利用をより自由にするとともに、各図書館が蔵書そのもののデジタル化を進めていく方向性での努力です。コロナ禍によって勢いが削がれてしまった感のあるコンソーシアムですが、その構築をあらためて積極的にやっていくべきだと考えます。

大学図書館以外の諸機関、博物館や美術館、資料館、各研究機関ともデジタル上の連携を進めていくべきでしょう。これはもちろん海外も直接的な視野に入れたネットワークの構築であり、リポジトリを通じた繋がり確保です。そこには論文単位ではなく、オープンアクセス内のデータのみ利用をめぐる権利や、著作権に関する新しい概念の創造など多岐にわたる課題がありますが、知を得る道はそこに向けて伸びつつあります。

その結果、図書館以外の場所から、あらゆる蔵書、研究資料にアクセスできる時代がやってくるのだと考えます。図書館を通じることで、図書館を超えていけるわけです。

しかし、そのように表現してしまえば、当然新たな問題が生じます。クラウド化した情報の海を漂う船のような図書館。やがて船の形さえ失い、図書館が端末化する時代が来ないとも限りません。これは迎えたくない未来です。携帯ショップやファストフードが立ち並び、どこの駅前もみな同じような風景になってしまった現代、総合的な利便性を追求するあまり図書館が「個性的な顔」を失ってしまえば、各大学の名を冠とする意味もなくなります。それを防ぐためにも、デジタルとアナログのバランスを真剣に考える図書館のあり方がより一層求められていくのだと思います。

世界から戦火が絶えず、むしろ拡大しつつある今、学生たちが一人の人間としてこの難題と対峙する機会が図書館にあるでしょうか。大学を育んできた地域の人々の声を聞き、交流していく場が図書館にあるでしょうか。学生や院生、教員が自由に研究し、その成果を発信できる場所が図書館にあるでしょうか。あるいは、孤独に苛まれ、挫折を引きずる若者が、かつての詩人の絶望と希望に向き合う空間が図書館にあるでしょうか。

デジタルの限らない進展とともに、温もりのある「居場所」を融合させた大学図書館の在り方こそが、新しい「ライブラリー・スキーマ」の構築であり、課題なのだと考えます。

全国の私立大学の図書館にとって、実り多い研究大会となることを祈ります。